

史跡岡城跡中川覚左エ門屋敷跡復元整備について

主席研究員 井上 年和

1. はじめに

史跡岡城跡中川覚左エ門屋敷跡は、平成19・20年度に史跡の保存及び活用のための環境整備を目的とした保存修理事業が竹田市により行われた。

当協会では、この事業において設計・監理を行ったので、その内容について報告を行う。

2. 岡城について

史跡岡城跡は、大分県竹田市に所在する。岡城は、伝承によると、文治元年（1185）に緒方惟義が源頼朝に追われた源義経を迎えるために築城したことが初めであるという。その山城は、南北朝時代の建武元年（1334）に後醍醐天皇の支持を受けた大友氏一族の志賀貞朝によって拡張され、岡城と名付けられたとされている。『豊後国志』によると、志賀氏が直入郡に入ったのは応安2年（1369）以降のことで、岡城に入る前は直入郡にあった木牟礼城を居城としていたという。

文禄2年（1593）の文禄の役で大友吉統が秀吉から鳳山撤退を責められ所領を没収されると、大友氏重臣の親次も岡城を去ることとなり、文禄3年（1594）播磨国三木から中川秀成が移封され、入城後に3年がかりで大規模な修築を施した。

縄張設計には石田鶴右衛門、三宅六郎兵衛、石垣普請に山岸金右衛門などが携わり、志賀氏時代の城域の西側天神山に本丸・二の丸・三の丸御殿・櫓を造営し、城の西側を拡張、重臣屋敷群を設けた。本丸に御三階櫓を設け、城門は志賀氏時代の大手口であった下原門に加えて近戸門を開き大手門を東向きの下原門から現在の西向きの位置に改め、3口とした。

2代久盛の代には清水門が整備され、3代久清の時に西側の重臣団屋敷を接收して西の丸を築き御殿を造営している。台風や地震、火事などの被害を多く受け、明和8年（1771）には城内の大半を焼く大火が起きている。

この大火の直後に岡藩は金七千両を拝借して安永3年（1774）の本丸三階櫓を始め、文政11年（1828）頃まで再建に取り組んだ。

表1 岡城における明和・大火後の普請

和 暦	西 暦	月	事 項
明和 8	1771	3	金七千両を拝借
		11	普請願い
安永 7	1778	5	本丸の未方櫓はじめ五棟の櫓の鮎上願い
安永 8	1779	5	西の丸御殿完成
		9	本丸三階櫓に鮎上
天明 3	1783	7	本丸の東御櫓完成
天明 4	1784	11	御廟完成
天明 7	1787	6	三の丸隅櫓完成
天明 8	1788	5	二の丸切手門完成
寛政 9	1797	10	本丸小三階櫓完成
享和 3	1803	1	本丸御門完成
文政 11	1828	5	西郭御門完成

明治維新後、廃城令によって岡城は廃城となり、明治4年(1871)から翌年にかけて城内の建造物は全て破却され、現在は石垣や建物の遺構等が残存している。

昭和11年(1936)には「岡城址」として国の史跡に指定され、平成18年(2006)には日本100名城に選定された。



図1 明治初年の岡城古写真
『復原大系 日本の城8 九州・沖縄』
ぎょうせい 1992年より転載

3. 中川覚左エ門屋敷について

3-1. 概要

岡藩家老中川覚左衛(エ)門の屋敷地は、西の丸北に並ぶ家老屋敷の北側に位置する。中川覚左衛門家は、茶道織部流の祖、古田織部正重勝の子孫で、藩主中川家に代々仕え、中川の姓を賜わり、延享2年(1745)にこの地に移り、第十世藩主中川久貞(享保9年(1724)から寛政2年(1790))の代に家老職を勤めた。

古田家の記録には、「ここは、字を奥近戸と言ひ、東南が開けて前に深い谷がある。竹林が繁り、西北には松の木があり、東西北には岩がそびえて、ここは険しい城のなかでも特に険しい所である。敷地は広く二千三百石取りの家老屋敷にふさわしい所である」と記載されている。

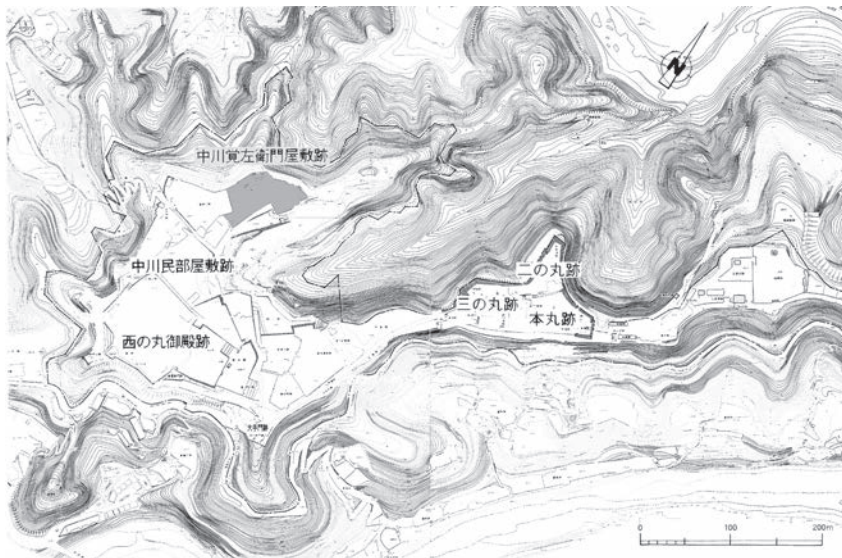


図2 岡城配置図

3-2. 古絵図「奥近戸屋敷家相轉調之図」について

敷地内の様子がわかる史料として、「奥近戸屋敷家相轉調之図」が残る。この絵図の制作年代は天明7年（1787）年以降であるとされている。この絵図を見ると、敷地内には主屋、蔵、厩、番所等の建物の他、土塀、垣、門、井戸、馬場、茶園、圃等、外周には石垣や植栽も描かれており、屋敷地の形状もよくわかる。

建物には柱位置と部屋の間取りが単線で表記されている。建具や壁等の柱間装置は記載されていないが、各部屋は緑、茶色、灰色の3色に色分けされており、緑は畳、茶色は板敷、灰色は土間を示すと考えられる。

平面構成をみると、絵図左側（南側）には式台、玄関、広間等の表向の部屋が配されている。式台を構えた玄関から広間までは3部屋が1列に並び、広間には座敷飾りを設え、庭園側には縁を設けている。

表書院から右には4部屋が1列に並び、奥の書院へ接続し、茶室が付設している。茶室は一畳大目で、床板が設けられ、右側（北側）の土間から茶室に入る。土間は路地庭に面しており、茶室へのアプローチとなっている。

その下は台所等に接続し、台所の右側（北側）には居間、その下には離座敷（局）等、内向の部屋が配されている。

玄関や台所の脇には土塀や門を設け、表と奥を区切っている。主屋の周辺にも西側には櫓台が描かれているが、建物は存在していないようである。東側には土蔵があり、床は板敷で出入口は土間のようなようである。

櫓台の南には鍵状の工作物が描かれており、これは遺構でも検出されているが、用途等は不明である。

3-3. 発掘調査遺構図について

中川覚左エ門屋敷は、平成5年度から7年度まで発掘調査が実施された。

調査において、主屋や土蔵、櫓台をはじめ、便所、土塀、門、井戸、鍵状遺構、池、飛石等の遺構が検出された。

「家相轉調之図」と比較してみると、式台前には飛石による通路があるが、これは、絵図が描かれた時代よりも後のもので、複数の時代の遺構が混在していることが確認された。

広間や奥の書院、茶室廻り、台所等は遺構の状態も良く、絵図と間取りが符合することが確認された。礎石や束石、狭間石等から柱間計画を割り出すと、畳敷きの部屋は、柱が約5寸の内法制で、縁や廊下等の板敷部分は一間を6.5尺とする芯々制となった。

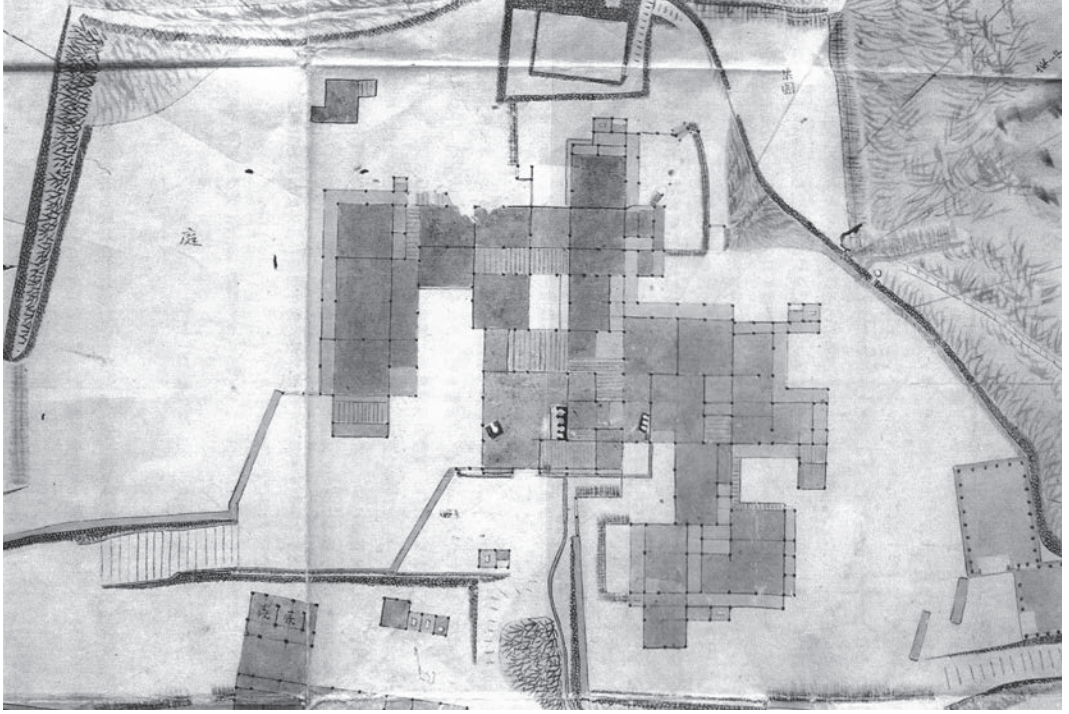


図3 奥近戸屋敷家相轉調之図（個人蔵）

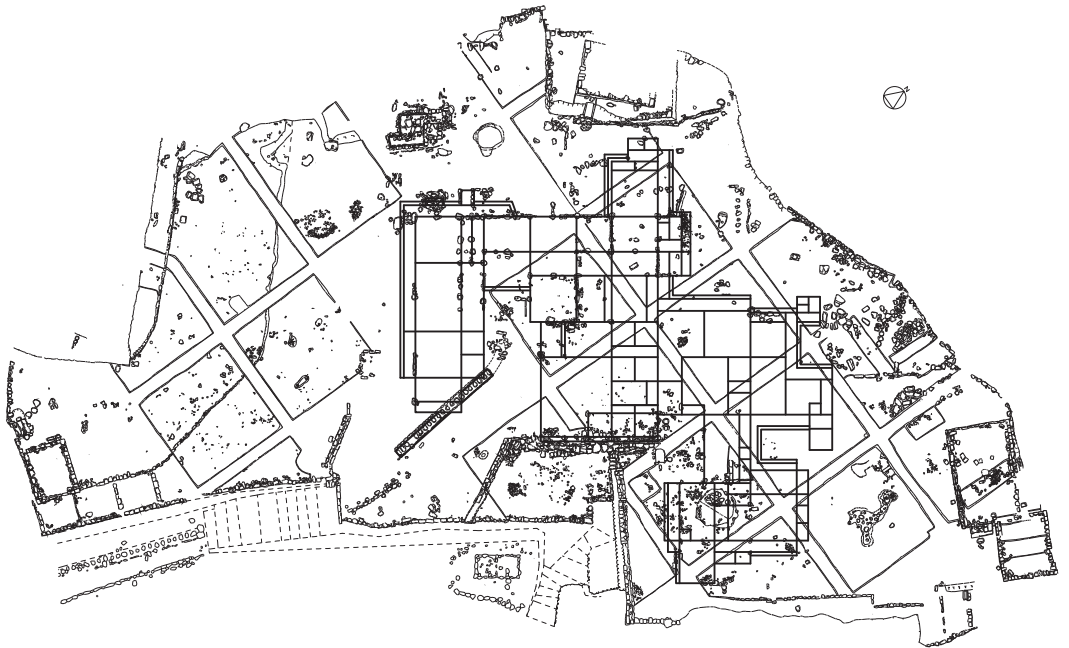


図4 中川寛左エ門屋敷発掘調査遺構図

4. 復元整備計画

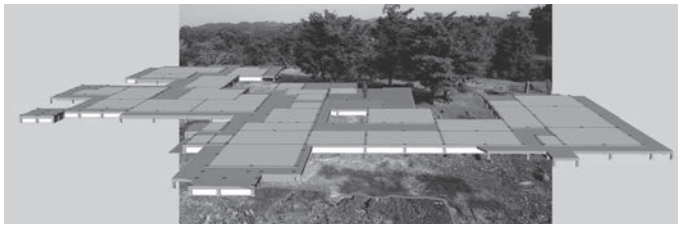
4-1. 間取りの平面表示

中川覚左エ門屋敷は、発掘調査成果をもとに史跡の保存及び活用のための環境整備を行う目的で、平成14年度に「史跡岡城跡保存整備基本設計報告書」（竹田市教育委員会）において、発掘調査により検出された遺構をそのまま現物展示し、発掘成果と絵図を基準として間取り等を復元・整備する基本方針が示された。

平成17年度においては実施設計を行うために、史跡岡城跡調査整備委員会（吉田博宣、北野隆、豊田寛三、服部英雄、渋谷忠章の各委員及び行政関係者）を開催して検討を重ねた。

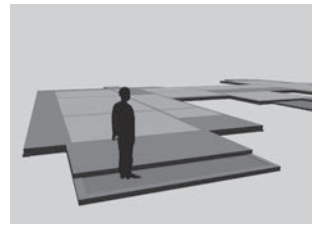
まず、建物の表示方法として、礎石や束石等の上に、建物の規模、形状、上部構造が推定できるように、床面の高さまで建物を復元することとなった。

床面の高さは整備案を複数作成した上で協議を行い、遺構面より60cm高くすることとし、畳敷きの部屋と縁・廊下等の板敷の部屋とは、敷居成だけ、床等の座敷飾りは、床框成だけ段差を設けた。

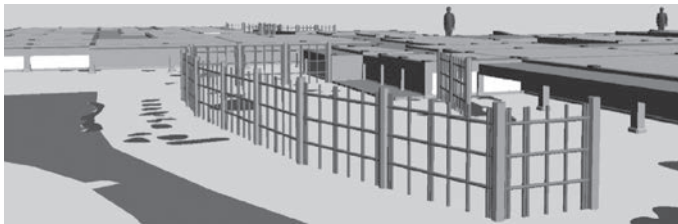


北西の檜台よりみた整備案

整備面を遺構面より60cmとし、板敷と畳敷の違いを表現する

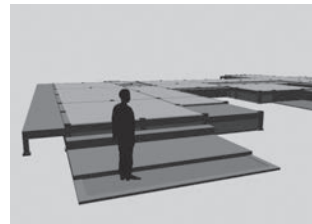


A案 整備面を遺構面より20cmとする



茶室廻りの庭園整備案

高さ90cmの四つ目垣を茶室廻りに設ける

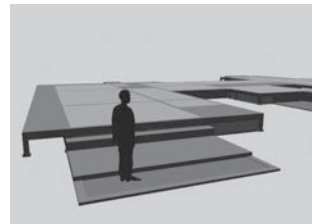


B案 整備面を遺構面より60cmとし、畳と床板に段差を設ける



玄関廻りの整備案

土塀の高さを30cmとし、塀の高さを90cm、土塀の高さを30cmとする



C案 整備面を遺構面より66cmとし、畳と床板に段差を設けない

図5 実施設計案（久山和美作成）

材料は自然素材を用いることとし、伝統的な工法に則り、軸部の組立や壁の仕上げを行うこととなった。

既存の柱礎石、束石、狭間石等の遺構は、現状を変更せずに、移動している石を据え直し、式台前に残る時代の違う遺構もそのまま残し展示することとなった。

4-2. 庭園整備

庭園整備については、図3の「奥近戸屋敷家相轉調之図」に表示されている庭園部の植生、土塀、柵等の配置に基づいて、地面の舗装整備、土塀、柵、竹垣、案内板等の工作物の整備、草木の植栽を実施することとなった。

地面の舗装や工作物についても自然素材を用いることとし、植栽については既存の高木や芝をできるだけ残すこととした。

新たに植栽する植物は、古田家文書『四季茶の湯 立花名目』に記載されているものを展示することとした。『立花名目』には、かつて覚左エ衛門屋敷内に植栽されていた植物が173種挙げられており、このうち169種類の種名が確認された。

その中で、植栽後も生育させるための育成、管理が困難でなく、病虫害に耐性のあるものを選定し植栽することとした。

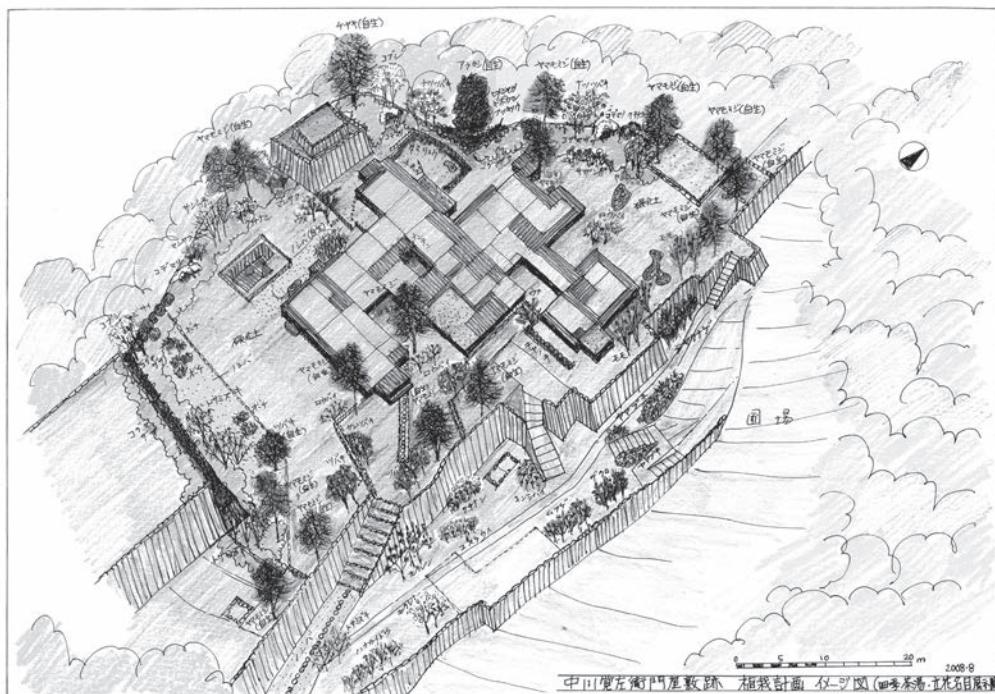


図6 植栽計画イメージ図 (吉田博宣博士作成)

5. 実施仕様

土間床下の地面は発生土に硬化剤を混入し、叩き締めて仕上げ、土間部分は三和土叩き仕上げとした。

柱礎石、束石及び狭間石は柱根・束根のそれぞれの高さを調整し、発掘調査で検出したものを基準に位置、高さを定め、叩き土等を用い、安定良く据付けた。各補足石は在来と同質、同形状、同仕上げを原則とした。

補足柱石にはアンカーボルトを差し込み、柱と緊結できるように固定した。

木工事においては、組立てを行う際には、遺構である礎石、束石、狭間石等への影響は避け、柱、束、土台は既存の遺構石や補足礎石に光付け加工を行い、継手、仕口はすべて伝統工法に則った。

ただし、床面までの復元であるため、軸部の安定性を確保するため足固めを付加した。

木材にはすべて加工後に防腐処理を施した。薬剤は九州木材工業株式会社製エコアコルウッドを注入したが、組立中に材を加工する必要が生じた場合は、その部分にも充分薬剤を塗布した。

壁はすべて上記と同様の防腐処理を施した木摺下地とし、茶室廻りは中塗り仕上げ、その他はすべて漆喰仕上げとした。

畳部分は、厚24mmの杉板を接着剤で二重に貼り合わせ、畳大に成形し床に敷き並べ、裏より目鋸釘で根太に固定した。

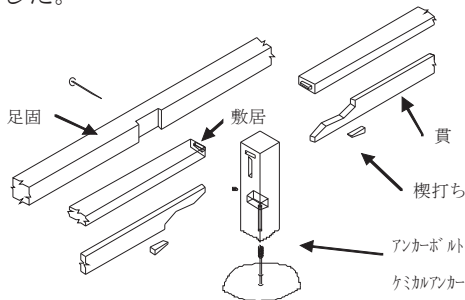


図11 床組の組立図



図7 整備前の状況



図8 礎石、束石の据付状況



図9 床組の組立中



図10 床組の組立中

土塀石垣、溝石、物見櫓石段、土蔵石積、その他舗装との見切り縁石の破損部分及び欠損部分や庭園の景石、飛石、建物周辺の手水鉢、踏石等に関しては在石にて積直し、据直しを行った。

建物外周、離座敷部北東の蔵跡の地面は発生土を叩き締めて硬化土仕上げとし、茶室周辺はマサ土舗装とした。

池跡は池底を砕石にて地業後、漆喰を塗り付けた。

植栽工事において、植栽種は下表のものとし、植栽基盤は良質土に完熟バーク堆肥及びパーライトを混合した。

表2 植栽した植物一覧

地被類	コグマササ、ノシバ、タマリユウ、フッキソウ、ヒメシヤガ、ボタン、キボウシ
草 本	
早 春	ウメ、ツバキ、サンシュ、マンサク
春 期	ボケ、シャクナゲ、モモ、ユスラウメ、ヤマブキ、ハナカイドウ、モクレン、コブシ、トサミズキ、コデマリ
初 夏	ザクロ、ナツツバキ、アジサイ、キンシバイ、ナンテン、クチナシ
夏 期	ムクゲ
秋 期	サザンカ、チャノキ
冬 期	カンツバキ、ロウバイ

竹垣は高さ90cmの四つ目垣とした。竹は径2～3cmの国産の秋切りマダケ青竹とし、掘立杭の合間に竹を縦横に組み、棕櫚縄で結束した。目の大きさは18～25cm程度として少し縦長に組み、堅子の上端を節切りとした。

塀は高さ90cmとし、柱の合間に胴縁を通し、幅9cmの板を表裏でれこ状に張り付けた。足元は風圧等による転倒を防止するため、防腐処理済みの木杭を地面に打ち込み、柱にはビス等により固定し、ビスの頭は埋木により隠した。

柵は柱に関しては防腐処理済みの木杭を打ち込み、塀同様転倒防止策を講じた。

土塀は石垣補修後、石垣頂部に瓦を充填し、叩き固めた。

案内板は庭園出入口及び建物内部に設置し、屋敷地の説明、古絵図、復元予想図を掲載した。

また、アプローチ脇の埋門に木製橋を設置した。



図12 手水鉢



図13 茶室前庭



図14 池跡



図15 屋敷地西の庭園

6. おわりに

本稿を作成するにあたり、各委員の先生方を始め、竹田市教育委員会の方々には大変お世話になりました。

この場でお礼を申し上げます。



図16 玄関、表書院



図17 屋敷地西にある鍵型遺構



図18 屋敷地南西の庭園



図19 土塀とその周辺

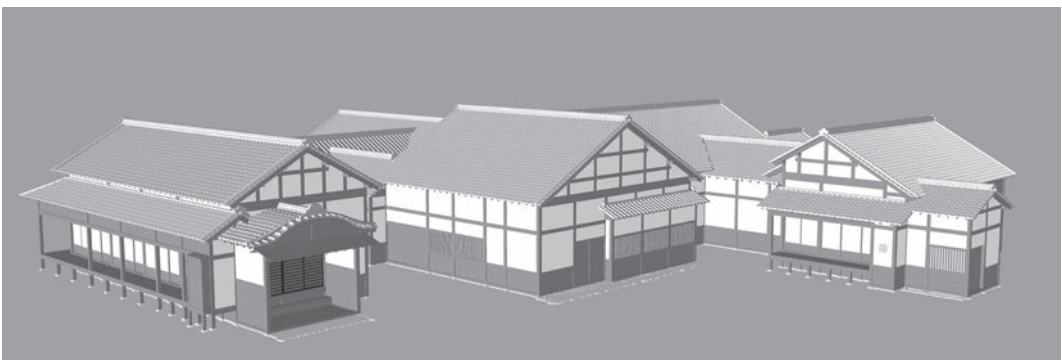


図20 復元予想図（久山和美作成）

